

## 物乞いに間違えられた光栄な日のこと

瀬田康司

### まえがき

フランスという国では、物乞いがごく当たり前のようになっている、ととてもとても、日本語の「乞食」という概念には当てはまらないほど、あっけらかんとしている。もちろん、「乞食」そのものも少なくないのだけれども。地下鉄の中では毎日のように、「昨日から何も食べていない」だの、「亭主が失職して、この子に食べさせるものがない」だの、「自分は学生だが、本を買いすぎて、この3日何も食べていない」だの、中には、やにわに手をにゅつと顔先に付きだしてくる者もいる。

路上では、「ひもじいです。S.V.P」と書いた紙を手に持ち、前には空き缶という、伝統的「乞食」スタイルが待っている。せめて車道には物乞いがいないでほしいと思いきや、段ボールに「失職中。何も食べていない。2ユーロ以上、お恵みを。S.V.P」と大きく書いて、車の行き交う中を仁王立ちしている。高級ウイスキーの名前のような省略文字は「お願いします」という意味である。これらは地方都市に行っても変わらない光景である。

そして不思議なことに、これらの物乞い・乞食の間には、アジア人は一人もいない。いや、一人も出会っていない。

### セガンの業績顕彰を求めて—ある年の3月上旬の雑記帳から—

久しぶりにからりと晴れた天気。しかし冷気が厳しく身を刺す。午前中は知的障害教育の開拓者オネジム＝エドゥアール・セガン生誕の地フランス共和国ニエヴル県クラムシー調査の整理にあたる。午後空気がゆるみ始めたのでパリの街の散策とする。

パリ社会福祉・病院博物館(Musée de l'Assistance Publique・Hôpitaux de Paris)を訪問。入館料は4ユーロと表示されていたが、今日は第一日曜日のために無料開放とのこと。同博物館では「19世紀から20世紀 病院と子ども：病院 またの名は?..」をテーマとしていた。セガンが1843年度に「白痴の教師」として勤務したピセートル救済院の詳細、セガンに関する展示があるかもしれないと期待して館内を回る。

テーマらしく中心展示は子ども病院の成立と発展過程。ネッカー子ども病院が1802年に、その前身の病弱者施療院として設立されて以来の、病院の規模、部屋のベッド数、ある年

の患者としての子どもの個人情報などが展示されていた。セガンが白痴教育を手がけるきっかけとなる出会いを得たゲルサン博士—病弱者施療院第2代院長—についてもパネル展示がされていた。しかし、セガンがゲルサン博士の仲介で、初めて教育・治療に関わった白痴・啞の子どもアドリアンについての情報は得ることができなかった。ネッカー子ども病院に関する展示を丹念に見学していくと、かなり古い時代から—19世紀前半期から—、いわゆる「病院内学校」「病院内学級」のようなものが存在していたことを知る。我が子が闘病中の病棟に「院内学級」が設置されていたという記憶がフラッシュバックしたこともあり、さらに詳しい情報を得たいと受付にて訊ねたが、幾つかの書籍を紹介されたのみである。さらに進んで調査をしてからそれらの書物に目を通すことにした。

展示には、「白痴」(Idiot)に関するコーナーがあり、フュリユス、ドゥリュスクルーズ、ブルヌヴィルのパネルが展示されていた。フュリユスはセガンの白痴教育実践を高く評価したパリの医療機関調査官であり、後年、ビセートル救済院長を務めた。ドゥリュスクルーズとブルヌヴィルは、医学博士として、1860年頃から1900年頃まで、ビセートル救済院の子ども部局で「白痴の子ども」の教育・治療に献身をした人たちであり、セガンの後の人びとである。いずれも、セガンの白痴教育実践・論の再評価を世に問うている。

通訳のAKさんに「セガンはないねー」とぶつぶつぶやいた。だが、ブルヌヴィル・コーナーこそ、セガンが開発した「教具(セガン教具)」ならびにセガンの代表作『1846年著書』、そして小さくではあるがセガンの「白痴」教育開拓の先駆者としての業績顕彰パネルが掲示されていた。特設展示であるので、それぞれの展示物は常設しているところにいけば見ることができると、案内を得た。「セガン教具」は、パリ第5大学内にある医学史博物館蔵である旨、添え書きがされていた。清水寛先生編著の『セガン 知的障害教育・福祉の源流』第4巻(第5部)に、アメリカのセガン研究者タルボット女史筆の「セガン教具」の翻訳を担当したが、それは書籍情報でしかない。今目の前にしているのは実物である。また『1846年著書』の実物を目の前にすることができている。ぼくにとっては、研究対象であるにもかかわらず、それらは幻の存在でしかなかった。ぼくのセガン研究は、これまで、生誕から白痴教育に携わるまでの生育史を追いかけたものであったが、今日の見学は、とうとう、セガン研究の本山を登る決意をさせることとなった。

研究の進展という喜びを運んでくれたのは——

パリ社会福祉・病院博物館に行くため通訳氏とパリ5区モンジュ広場で待ち合わせをし

ていた時、老婦人が声を掛けてきた。タバコを吸っていた時だったので火を貸してほしい  
と思うのだと思っていた。婦人はバッグからちょうどタバコ入れの大きさのものを取り出  
した。口を開け指をつっこみ、取り出してきたのは、タバコではなく、2ユーロ硬貨だった。  
ぼくを物乞いと思ったらしい。あわてて、ノン・メルシーを繰り返した。旅に出てから伸  
び放題の髭、寒さを避けるために着込んだ服はどう見ても清潔には思われない。いつもせ  
びりとられてばかりいるパリで、逆に恵みを与えられるかの存在となったぼく自身を、大  
いに喜ぶ。

やがて駆けつけてきた通訳氏にこの話をする。

「芸術家っぽいですけどねぇ。」

「ほら、ゴッホだって、生前は貧困を絵で描いたようなものだったからね。芸術家とい  
うのは物乞いの代名詞かもね。」

「ゴッホのようになかなか世の中に受け入れられない先生のセガン研究も、ひょっとし  
たら、ゴッホが新しい技法を見いだしたと同じように、研究の進展が見られるといいで  
すね。」

「歩き回り見て回れば、いつしか、研究も新しい視点が生まれると信じてます。歩き回  
り見て回るにはビシッとした衣服ではなくビシッとした感性で身を覆わなきゃね。」